



Rokko Catholic Church Bulletin

カトリック六甲教会 教会報

2014

2

No.506



目を逸らしてはならない事実

助任司祭 片柳 弘史

どんなに大切に守っているものも、家族や友人、自分の命さえも、明日には奪い去られるかもしれない。先日、東遊園地で行われた阪神淡路大震災慰霊の集いに参加して、改めてそのことを思いました。苦勞して建てた家や、何とかして守ろうとしていた家族、かけがえのない友人を一瞬のうちに奪い去っていく自然災害。人生計画を一瞬にして崩壊させる事故。これまで当然と思ってしていた歩くことや話すこと、手を動かすことが突然できなくなる病気などは、本当に明日起こっても、あるいは1秒後に起こってさえおかしくないことなのです。

この当然の事実から、わたしたちは普段、目を逸らしてしまっているように思います。すべてをこれまで通り持ち続けられることを前提として、もっと財産を増やそう、もっと偉くなろう、もっと力を持とうなどと考えたり、一度手に入れたものを何とか守るために争ったり、不安に陥ったり、恐れしたりするのです。ですが、どんなに手に入れ、どんなに必死に守ろうとしても、それらはいつか突然に奪われます。もし自然災害や事故、病気などがなかったとしても、人間はやがて必ずいつか、「ある日突然に」死を迎えるのです。

この事実を直視するとき、わたしたちは人生について考え直さざるをえなくなるでしょう。もしすべてを奪われるのなら、そんなに一生懸命になって手に入れたり、守ろうとしたりすることに、いったいどんな意味があるのでしょうか。わたしたちの日々の営みには、いったいどんな意味があるのでしょうか。人間関係や地位、名誉なども含めて、持っているものに人生の意味を見出そうとするなら、わたしたちの人生は虚しいと言わざるをえないでしょう。わたしたちは、自然災害や事故、病気、そして死を前にしたときまったく無力で、それらを最後まで守り抜くことはできないからです。

わたしたちの人生の意味は、持っているものではなく、生きていること自体にあるとわたしは思います。毎日を精いっぱい生きること、思い切り笑い、思い切り泣き、大きな声で歌い、全力で走り、家族や友人たちと心ゆくまで語り合う一日一日が、わたしたちの生きる意味そのものだと思うのです。神様から与えられたすべての力を使って、命を精いっぱい生き抜くこと。家族や友人たちと一緒に幸せになること。この世界を、昨日よりも少しだけよいものにすること。それ以上のことを人生に求めるなら、それは贅沢というものでしょう。

財産や地位、名誉、人間関係などは、そのように精いっぱい生きている毎日の結果として与えられるものにすぎません。それらに執着して、一日一日をつまらなくしてしまうなら、それはまったく本末転倒でしょう。どんなに大切に守っているものも、家族や友人、自分の命さえも、明日には奪い去られるかもしれない。阪神淡路大震災の発生から19年を迎えたいま、改めてこの事実を直視し、人生について考え直してみたいと思います。



新シリーズ

「何でも知っとこ」(11) 信徒使徒職の教令その2

主任司祭 松村 信也

〔4〕使徒職の種々の分野

キリスト教は、人々の生活を変えていく使命をもっている。しかし、独りの人間の力には、限界があること、すべては聖霊の力によるものであることをよく心に留め、小教区、諸団体は互いに助け合い協力しあい、使徒職の模範である神への愛と人間相互の愛を、小教区の中で示していくことが大切である。そのため家庭は、使徒職の模範を示すすべてに共通した基盤であると考ええる。つまり、夫婦の相互愛は相互奉獻のしるしであり、その子供は、神からの賜物とみて尊敬をもって育くむことによって、子供も両親の中に神のみ姿を見出して従おうとするのである。そこに家庭こそすべての使徒職の源泉であり、子供が成長して、外の世界に入って自ら更に広い使徒職を行うための教育の場であると考えられる。

また教会の中で青少年は次代を背負う重要な力である。従って、大人たちは、まず自ら積極的に模範を示し、互いに話合う機会を作り、年代の差を克服し、互いに理解しあうことが大切なのである。そして、大人は青少年たちに機会ある度、賢明な助言と有効な助けをしたり、彼らの使徒職を励ますことによって、青少年は大人に対する尊敬と信頼の念を持つようになるであろう。しかし、現実をみると、二つの世代の相互不理解と相互不信が見られるのは残念なことである。

現代の社会環境というとき、常に大きな社会を指して言うのではない。大きな社会は、小さな社会から成り立っていることを私たちは忘れてはならない。同じ仕事仲間やスポーツ仲間、町内会仲間や井戸端会議仲間など、すべて自分の周りにある「仲間意識」を意味している。ほとんどすべてと言ってよいほど、人間はこの意識の中で互いに人生を学び、友情を培い、相互理解と相互援助という命の幅を身につけているのではないだろうか。このような共同体の種類は千差万別であるが、かなり強い共同体意識で結ばれているのである。これらの共同体に、もし神の愛に燃え、自分に託された使徒職に目覚めた人が、それらのリーダーとしての人格的性格と人望があったなら、大いにその共同体に影響を与えることになるだろう。多くの人々は身近な使徒によって福音を聞き、キリストを知る以外に道がないのである。

国家的単位においても、風俗、文化、習慣などの違いを越えた自然法に基づく道德律と共通善が追求され、国民の真の福祉と向上とがみられる国家の建設と、その実現を神は望まれている。そのみ旨に適う国家建設のために、各人が果たせる可能なものを力の限り果たすよう努めることである。

〔5〕使徒職の種々の方法

使徒職実践の具体的な在り方として、個人として行う使徒職と団体、会に加入して行う使徒職に分け、それぞれ使徒職の有り方をあげる。

個人としての使徒職

- ①信仰、希望、愛からにじみでる生活全体による証であること。
- ②ある環境において絶対に必要な、ことばによる証であること。
- ③市民としての、この世の秩序の再建とその運営に対する協力。

④自分の生活を愛で活かし、それを行為にあらわす愛の実践。

⑤公的礼拝、祈り、苦業などによる世界の救いへの貢献である。

これらは使徒職の目的でもあり、分野でもあって互いに絡み合っており、実践において生かされる時、これらは相乗効果をもたらすのである。そして、この方法は、団体、会として行う使徒職を含めたすべての使徒職の根源でもある。

それぞれの能力に応じた働き（自己性の自覚）、プラス他者性を考慮した行為こそ、キリストの行為に倣うことであり、キリストを生きるのである。しかし、この世に派遣された教会の使命を遂行するために個人の力には限界がある。そこで団体、会に加入して行う使徒職がある。

団体としての使徒職

①一致協力による組織、団体の力を生かし、現代社会に対応する。

②一致協力した共同体の姿こそ真に教会共同体の象徴である。「私の名によって二、三人集まるところには、私もそこにいる」（マタイ 18-20）。

③キリストを頭に、それぞれの能力、カリスマに応じて集う団体とするなら、派遣される場として現代社会の中に、有効に、賢明に、勇敢に造り上げられねばならない。つまり、外面的な活動を志向し、それを推進する。

④団体の活動目的は、団体にとって団体そのものではなく、その活動が教会の目的に合致していることが大切である。

注意すべきことは、現代社会と派遣される場の環境を充分分析し、そこで何が必要とされているのか、どのような方法がその社会では大切にされているのかを考察する。これを無視し、他の場所で上手くいっているから、同じ方法をすべてに当てはめるのは適切な方法ではない。このことは、その他のいろいろな運動についても同じことが言える。これを前提条件に諸外国へも発展していくことは、大いに推奨されるべきである。

信徒使徒職の構成員は、彼ら自身同時に現代社会の構成員でもあるから、信徒の使徒職こそ、教会が市民社会と容易に接触できるのであって、信徒の手を借りることなしに教会は、使命を果たし得ないであろう。従って、いろいろな活動に献身的に従事しているすべての信徒に対して、司牧者は感謝の気持ちで彼らを受入れ、彼らの奉仕職に対し、精神的にもかつ物質的にも援助することは大切である。

忘 れ な い で！

～東日本の被災地から～

伊豆大島の災害、フィリピンの災害など、私達の地球は天災、人災が次々と生じ、この出来事をどのように受けとめたら良いのでしょうか？世界が一つの心になって、自分の国の損得を超え、地球が一つの住まいとし、世界レベルで万民の幸せに本気で思いを走せなければならない時代になったのではないのでしょうか？地球はもともと領土は無く、万民のものでした。地球の大自然は万民のものであり、神様から戴いた宝物。皆が幸せになり、喜びを分かち合い、互いが助け、協力し合い、幸せになる為の地球自然でした。私達地球人に貧富の差、人種の差、差別というのはあってはならなかったはず。各々にとって、人間だけでなく、草や木も、鳥も虫も、動物も、あらゆるものが地球に存在した時はキラキラ輝いていたはず。私は人間の「欲望」がこの美しかった地球をすっかり変えてしまったのだと思います。この地球が生れ変わる為にはどうした

ら良いのか？それは各々が自分の「欲望」を自分の私欲に向けるのではなく、「他者の幸せ」に心の視点を向けさせ、「欲望というエネルギー」を良い方向に向けることではないかと思っております。私達の中にある競争心を「他者を助ける競争心」に変えてみませんか？

今日は冬に向かって寒さに耐えて居られる山村の方々をお話しさせていただきます。

＜原発被災者の山村は今＞

・原発被災地で海岸沿いは南相馬市（鹿島、原町、小高）、浪江町、双葉町、大熊町、富岡町、楢葉町、広野町です。

・山村は飯館村、津島（浪江）、葛尾村、都路村、川内村、主に 399 号線沿いに沿ってある所です。海拔 500～700mの所にあり、12～3 月末は零下 7～10 度となり、所により零下 17 度の所もあり、道路も凍結し、寒さは厳しくなり、店も病院も少なく、自給自足の生活だったと言います。山村で山の水は美しく、山の沢水、井戸水を飲料水とし、水道は不用であったとのこと。生活は農業、畜産、林業、花畑、シイタケ栽培、かいこ、炭焼きなど、自然は厳しいけれど、のどかで、大好きな村であったと言います。食費にお金がかかることも無く、山には山菜があり、田畑には食べ物があつたと言います。厳しい自然の風雪にも耐え、順応して生きて来られた村人の皆さんの人の好き、素朴さ、人間味、善良さ、無口、忍耐深さ、暖かい人柄は、私達現代人に忘れてはならない人柄の良さというのを思い出させてくれます。

・こんなに善良な方々が原発の犠牲者になり、村を追い出され、今は 4.5 畳一間の寒くて、湿気の多いプレハブの仮設住宅で、多くのストレスに苛まされながら、家族ともバラバラになり、食費もままならず、じっと一人で耐えて居られるのです。皆様、あまりにも悲しすぎませんか？

・東電は 20km 圏外の人の賠償金は今年の 8 月で打ち切りました。その為に、山村の多くの人も打ち切られ、被災者扱いで無くなった為に、税金の支払負担も生じ、収入源も無く、自宅に帰って田畑を耕すことの出来ない山村の方々は、生きる術を失い、食費も生み出せず、栄養失調で倒れて行くと聞きました。生活費は唯一、除染作業で生み出しています。助かった命が、又、生活の為に被曝の危険に身をさらして、これで良いのでしょうか？

・20km 圏外は帰って良いと言われ、（解除宣言です）今は 20km 圏内の人も、泊まってはいけないけど帰って良いと言われたと言います。仮説に居るだけでおかしくなると言うので、自宅の出入りをするようになった様です。しかし、放射線量は高い所もあり、解除された所でも、0.15 マイクロシーベルトあり、大丈夫と言われているとのこと。しかし、帰っても、お店も病院も無い、農業も出来ない、山菜も食べられない、牛も豚も家畜はもういない。井戸水は飲んでも良いと言われたそうです。何故なら放射能は 1m の範囲内なので、井戸はそれよりも深いから、飲んでも良いと言われたとのこと。です。

みなさん、被災者の健康に対し、あまりにも無責任ではないでしょうか？原発被災者の山村の方々をこのまま放っておいて良いのでしょうか？

寒さは半端ではありません。どうぞ、毛布、タオル類、下着、靴下、カイロ、マスク、紙パンツ、紙オムツ、トイレットペーパー、洗剤、シャンプー等の生活消耗品、水、米、調味料、缶詰、お茶、お菓子等未だ沢山必要としております。どうぞ宜しくお願い申し上げます。

尚、送っていただけます方は被災地をご紹介しますので、私、福岡にお問い合わせ下さいませ。皆様の善意が被災者の苦しみを乗り越える力となりますように。（福岡 百子）

＜福岡百子さんの紹介＞

福岡さんは会津生まれの福島育ち。現在、千葉県松戸市に住んでおられます。未だ被災地の復興は程遠く“同郷の方々の苦しみや困難な生活を忘れて欲しくない”と体調が悪いにも

関わらず、被災者の支援を行いつつ、現地の情報を発信。

私は大阪教区のENG Oを通じて彼女の活動を知り、福島の惨状を見聞きしておりましたので、何かお手伝いをしないではおられず、彼女の情報を知り合いの方々に発信。『福島を忘れないで』にご協力してくださる方をさがし、支援をお願い致しております。

(援助修道会：佐藤道子)

(問い合わせ先)

福岡百子 10:00～17:30

<http://momfukuoka.exblog.jp/>

※広報部ではシリーズ「忘れないで！東日本の被災地から」への原稿を募集しています。被災地でのボランティア活動に限らず、遠く神戸からの支援活動や被災地への思い等、皆さまからのご寄稿お待ちしております。(広報部)



<行事報告>

洗礼を受けて (2013 年 12 月 15 日)

昨年の 12 月、松村神父様から洗礼を授けていただきました。後期高齢者になっている現在、自分自身の人生においてキリスト教に入信するなど全く考えてもいなかったもので、今でもこれで本当によかったのかと自省することがあります。

それには相反する二つのことがあります。子供の頃は仏壇の前に正座させられて父の読経を聞いて育ちました。また一方で、成長するにつれて、自宅にあった文学や哲学書等を断片的に読む機会があり、今でも頭の片隅に残っている短い文章があります。例えば「狭き門より入れ、滅びに至る門は広く…」とか「求めよ、さらば与えられん…」など聖書に出てくるものでした。このような小さな記憶が「聖書とはどのようなものか」、一度読んでみたいという気持ちにさせたことは確かで、自分では意識しないまま何となく関心があったのだろーと思ひます。

海外へ出張したり、後年家内と旅行する機会が多くなる中で、ヨーロッパのほとんどの国には何百年にもわたって築かれた立派な教会があり、その内部のマリア様中心のフレスコ画やキリストに関するテーマが色彩豊かにステンドグラスに収められているのを見る機会が増えていきました。また、教会の建物そのものに壮大さ、厳肅さを感じていました。

絵画ではフィレンツェのウフィツィ美術館にあるダビンチの「受胎告知」、ミケランジェロの「トーニのトンド」、特にラファエロの「ひわ鳥の聖母」やトレド大聖堂にあるエル・グレコの「聖母の被昇天」が心に残っています。かなり以前のことですが修復前の「最後の晩餐」を見たこともあり、その他かなりのキリスト教関連の冊子や絵葉書等も集めましたので、キリストというのか「聖書」を勉強してみたいという気持ちが高まっていました。



一昨年の夏頃、教会事務所から家内経由で「松村神父様が聖書講座を始められますので如何ですか？」と声をかけていただきました。実を言えば教会という所へは長男の結婚式に一度行ったことがあるくらいで、その後も縁がなく、どうもその気になれなかったのが正直なところでした。しかし、家内が熱心なクリスチャンで教会のオルガンとか教会学校のお世話とか長い間、いろいろ活躍していましたのは知っていました。そんなことが自分自身に影響

響したとは思ってはいませんが「聖書の勉強はしてみたい」という気持ちが強かったこと、親元を離れて独立して以来、信仰心が大変乏しかったなという事を今になってひしひしと感ずるようになったのは確かです。

そこで聖書の勉強会に入れていただき新約聖書「マタイによる福音書」から読み始めました。ところが大変難解であったこと、ありえないことが多すぎることに、理に合わないことが多すぎてついていけないという経験を何回かしました。そのような時期のある日、松村神父様が「信仰とはとにかく信じることです」と言われたとき、「あ、これか！！」と気づきました。つまり、イエスの言葉の「心を尽くし、精神を尽くし、思いを尽くしてあなたの神である主を愛しなさい」ということと同じなのだと理解するに至りました。

この年令まで長い間、信仰心がほとんどない生活を送ってきたことの反省とキリスト教というものをもってよく知りたいという思いが自分を教会へ向かわせたのだという理解をしています。

2000年以上つづくキリスト教の歴史の中で王侯、貴族、領主、宗教者の権力が強大であった時代が圧倒的に長く続きました。一般庶民の苦しみは大きかったでしょう。しかし、一方では現在に残る数多くの教会そのものや芸術、文化を花咲かせ、今日に至っており、そのことがキリスト教を庶民一人ひとりの心の中に根づかせ、そして世界中に広まったのだと考えています。

(ヨセフ 高田)



<行事報告>

2013 みんなで分かち合うクリスマス (2013年12月15日)

クリスマス会は、教会学校だけで行ってきましたが、それを教会全体のものにしようということになってから、何年になるでしょう。毎年、文字通り「老若男女」が集い、歌や寸劇、そして祈りの集いを、楽しみ、味わってきました。この頃は、文化としてのクリスマスが全国的に浸透し、ただ楽しむだけのクリスマスが蔓延しています。そんな中、教会のクリスマスということで、待降節中ということもあり、意味のある、祈りに充ちた会にしたいと企画しました。

お元気な熟年の皆様方の明るい歌声、中でも「アンパンマンのマーチ」は参加者全員のテンションを上げたと思います。高校生ヴァイオリニスト須藤くんの演奏にうっとりとなったところで、我が六甲教会のスター俳優片柳神父様主演の劇「サンタクロースは、ほんとうにいるの」では、笑いの中に、信じるということの大切さ、美しさを訴えたつもりです。この劇のモチーフは、1897年にニューヨークの新聞社に寄せられた8歳の女の子の手紙へのベテラン記者の有名な返事です(社会思想社発行「クリスマス小辞典」より)。子どもの心を傷つけず、豊かにする素晴らしい手紙だと思います。



最後の祈りの集いでは、まだ復興の道半ばで、まだまだ問題山積、苦しんでいる方々の多い東北に心を寄せ、祈りと歌を捧げました。一人ひとりの力は小さく、なかなか大きな働きはできませんが、いつも忘れずにいて、祈り続けることが大事だと思います。

この日、会場の皆さんの心が一つになって、祈りのうちに会が終わり、ポツと温かいものが心に残ったように感じました。ただちょっと残念だったのは、参加者の数が多くなかったということです。教会全体の心が一つになって、絆を紡ぎ、よいクリスマスの準備となるような会ができたらよいと思います。

(阿部)



<行事報告>

六甲教会混声合唱団 グランダ御影山手訪問(12月22日)

赤鼻のトナカイさんとサンタさんの指揮で始めましたグランダ御影山手のクリスマス会は入居者の皆様と共に音楽を通して心を通わせる一時となりました。

「四季それぞれの歌」と「花は咲く」「クリスマスの歌」を歌い続ける中で、一緒に口ずさみリズムをとり、手拍子までして下さいました。アンコールの声を聞きながら私達のささやかな奉仕に対して頂く宝物の大きさに胸が熱くなりました。

出演の声をかけて頂きましたことに感謝しながら、心温かい思いで帰路につきました。ありがとうございました。感謝のうちに 六甲教会混声合唱団 藤井

.....

六甲教会混声合唱団の皆様、先日はご多忙のところ、グランダ御影山手のクリスマス会にご参加いただき、またぶしつけなお願いをご快諾いただきましたこと、誠にありがとうございました。

当日は、クリスマスソングはもちろん、サンタの衣装も着てくださり、曲だけではなく雰囲気でもクリスマスを楽しむことが出来ました。サンタが登場した時はご入居者様もとても喜んでいらっしゃいました。「花は咲く」では感動されるご入居者様もおられ、「もう一度聞きたい」という声を何度も聞くことができました。たくさんのご入居者様に楽しんでいただくことの出来た素敵なクリスマス会だったと思います。皆様のますますのご活躍とご健勝をお祈り申し上げます。

グランダ御影山手スタッフ一同



<行事報告>

新 成 人 祝 福 (1月12日)

1月12日10時のミサの中で、新成人信徒に祝福が授けられました。また、続いて行われた教会新年会の中で、新成人としての抱負と夢を力強く語ってくれました。お名前をご紹介します。

エンマヌエル	菊地君
アルフォンソ	沓脱君
マリア・エリザベト	高橋さん
クララ	松井さん
アルベルト	末宗君

成人式に参加させていただいて

今年は、娘が大勢の方々に成人式を祝っていただきました。昨年とはうって変わって穏やかな天候の中、五人の教会学校の仲間にも会え、至福の時をいただきました。

子供が幼い時は、7人家族で教会のミサに授かるのが楽しみでしたが、大きくなるにつれ、地方の大学へ行ってしまったり、学校やアルバイト優先で、なかなか家族全員と一緒に教会に行く回数も減りました。

久々に会う二十歳の成人達は、とてもあたたかいお言葉を大勢の方々から頂き、親として感謝の気持ちで一杯です。「お帰り」＝「ただいま」、「来て、良かった」＝「また、おいで」いつでもおいで、待っているよ、と言われて、彼らはどれだけ幸せな場を与えられているのでしょうか。

その恵みに気づき、成人として、キリスト者としての自覚を忘れず一步一步この多難多忙な日々をしっかりと歩んでほしいと願います。これからの教会を支え、次世代へつないでくれる青年達を私も祈り、支えたいと願うばかりです。

時間と心をかけて、食事や楽しいプログラムなどお祝いの場を準備して下さった多くの方々に心よりお礼申し上げます。有難うございました。
(高橋)

《各部だより》 各専門部会の活動をお知らせいたします

☞ 小教区評議会

2月8日(土)10:00 拡大評議会
於 イグナチオホール

☞ 宣教部

2月23日(日) 11:15 部会

☞ 地区会

2月2日(日) 地区役員会



☞ 社会活動部

2月7日(金)初金ミサ後 連絡会 第2会議室
ボランティアグループの方はご出席をお願いします。

☞ 三日月会

2月17日(月) 例会



☞ 施設管理部

2月23日(日) 10時ミサ後 部会

☞ 典礼部

2月16日(日) 音楽関係奉仕者の集い
2月22日(土) 聖体授与の臨時の奉仕者の集い

☞ 広報部

3月1日(土) 教会報3月号発行

～．～

《お知らせ》 教会のみなさまに知って頂きたい活動やお知らせです

★ 社会活動部より ★

2月 5日(水) 10時 手芸の集い (第1・2会議室) どなたでも参加ご自由です。

2月16日(日) 10時ミサ後 ふれあい広場(イグナチオホール)

お弁当・食料品・手作り作品等の販売。東北物産展。

2月24日(月) 9時30分 ともしびケーキづくり(イグナチオホールお台所)

☆ 2月の炊き出しはお休みです。



～．～

＜主日10時のミサにおけるオルガン後奏について＞

数年前から、ミサの始まりの時、先唱の案内前に静かに祈りにいざなうオルガン前奏をはじめました。できるだけその日の典礼暦や聖書朗読に合わせて、各オルガン奉仕者がそれぞれ苦心して選曲をしておりますが、自然な形で定着してきました。

そして2月からは主日10時のミサの閉祭の歌に続いて、オルガンによる後奏をすることになりました。主任司祭からもつねづね提案されていたのですが、ミサ後、静かに祈っておられる方もあるため、見送ってきました。しかし、主日のミサはみなで捧げる祈りであり、そこで力を得て世の中に派遣されていくものです。元気に派遣されていきたい、と言う気持ちで、どうぞ大きな声で「神に感謝」と唱和

し、閉祭の歌を歌って下さい。その後、みなさんの気持ちを少しでもオルガンで支えることができればと思います。

ミサは終わっていますので、お急ぎの方はお帰りになっても、お友達にご挨拶をされても、座ったまま聴いてくださっても結構です。はじめは驚かれるかもしれませんが、それぞれオルガン奉仕者が一生懸命準備をいたします。よろしくお願いいたします。

(なお、四旬節中はできるだけ楽器を使わない、と言う典礼上の決まりがありますので、後奏はありません。)

典礼部 三浦

～．～

★墓地っ子だより★

イノシシの被害

教会のお墓は六甲山麓にあります。西は須磨から東は宝塚までの六甲山麓はイノシシの生息地です。つまり、お墓は猪の居住地にあると言えます。イノシシの側から見ればお墓は侵害者なのかも知れません。



墓地にはイノシシ避けの柵がありませんし、広大な範囲ですので、柵を設けるとすればかなり高額な工事費がかかるでしょう。イノシシ避けに最も効果的な方法は電流を流す電線を張り巡らすこととの報告もあります。しかし、墓地には電源がありませんのでこちらも施工は無理のようです。

やはり、墓地保有者による自主防衛、自主管理しかありません。

実際の被害は ●墓地を掘り返す ●芝生などの植栽を剥がす ●スプリンクラーを折る ●花立てを倒す、などです。ただいずれも軽度の損傷ですので、スコップや箸を使い5～10分程度で直せます。やはり、こまめにお墓の守っていく事が必要だと思います。どうしてもお墓参りが難しい方には、コンクリート固めと玉ジャリ敷きをお勧めします。1区画3,500円程度です。

最近のお墓には、各種の桜、金木犀、ハーブ等を植えています。春になればどうぞお越しください。

(墓地委員会 SF)

～．～

《図書室からのお知らせ》

2014年1月に入った図書から

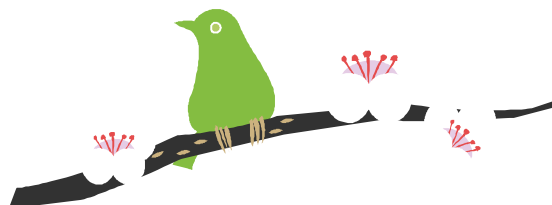
☆ **アルツハイマー病は今すぐ予防しなさい** ——高島明彦 産経新聞出版部

昨年10月27日の六甲教会社会活動部の講演会 大西先生のお話にあった中で、認知症の67%を占めるアルツハイマー病の「15の予防策」を今一度復習されたい方に、また残念に聞き逃された方にお勧めします。前向きな心構えと早めの対策が肝心とのことでした。(寄贈された本です)

図書室への投書にお答えして

「土曜日の19時のごミサに出て、本を返却したいのですが…」という投書がありました。図書室では、土曜日のミサ時に、図書室返却箱を用意することにしました。聖堂入り口におきますのでご利用下さい。

図書室の多くの方のご利用をお待ちしております。使い勝手や、蔵書についてのご意見、購入希望図書などお寄せ下さい。カトリック教会ならではの図書室を目指して充実を図ってまいります。



★「高山右近 列福を祈る巡礼」のご案内 ★

大阪教区の高山右近列福運動推進委員会より、巡礼の案内が来ております。

4月12日(土)・日帰り 雨天決行 全行程バス旅行となります。

旅行代金：4,000円

代金には、右近の郷運営委員会協力金・昼食代金を含みます。

詳細は聖堂入り口のポスターをご覧ください。お申し込み・お問い合わせは教会事務室までお願いいたします。教会への申し込み締め切りは3月23日とします。

神戸地区からは東・中・西の各ブロック各1台の3台を予定しています。人数が多い場合は、各教会で調整が行われます。



みんなの広場

「教会」とは

ヨハネ 三好

“親子は主の律法で定められたことをみな終えたので、自分たちの町であるガリラヤのナザレに帰った。幼子はたくましく育ち、知恵に満ち、神の恵みに包まれていた。”（ルカ2：39、40）

2月2日「主の奉献」の祝日に読まれる福音はこう終わっている。

ルカは福音を12歳の過越祭に両親とエルサレムへ上られ、と事に続けている。その末尾にこう書き残した。

“しかし、両親にはイエスの言葉の意味が分からなかった。それから、イエスは一緒に下って行き、ナザレに帰り、両親に仕えてお暮らしになった。母はこれらのことをすべて心に納めていた。イエスは知恵が増し、背丈も伸び、神と人ともに愛された。”（ルカ2：50～52）

信仰はともすれば抽象的というか理念のものになりかねない。福音の記述は殆どすべてといてよい、ロヨラの聖イグナチオが「自分がその場において見よ」というほど生きている人間の肉体の行動そのままである。私たちは日々この地上の現実の中で生きている。マリア様も、ヨセフ様も、その中へイエス様も。地上の教会も地上の現実の中に置かれている。主はピラトに「わたしの国はこの世には属していない」と宣言されたにもかかわらず。私たちに「教会」とは何だろう。



教会報3月号の発行は、3月2日(日)です。

編集会議2月24日(日)です。

記事原稿は、2月16日(日)正午までに
信徒会館受付へご提出願います。(広報部)

<http://www.rokko-catholic.jp>

カ	ト	リ	ッ	ク	六	甲	教	会
〒	657-0061	神	戸	市	灘	区	赤	松
		町	3-1-21					
電		話	0	7	8-8	5	1-2	8
								4
F	A	X	0	7	8-8	5	1-9	0
								2
発	行	責	任	者	松	村	信	也
編	集	広					報	部